
七草

バカ夜空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七草

【Nコード】

N7606Y

【作者名】

バカ夜空

【あらすじ】

父の仕事で転校を繰り返していた男の子。高校二年生になってようやく長居できる場所に来了。早くこの場に慣れたい男の子は友達を増やしていきたくていろいろな人に声をかけるが、相手はだんだん恋愛感情へ!?

のほほん系ラブコメディです

転校初日は良い感じ！？

視線、視線、視線。視線が痛い。

ここは白神学園の高等部。学年は二年。僕のクラスは縁起の悪い四が入った四組だ。

ちなみになぜ四が縁起の悪い数字かというところ『し』と読んで『死』と書くから。まあ、どうでもいいけど。

……話を戻すが、視線が痛いのだ。わかっていると思うけど物理的な痛みじゃないからな？ 精神的にダメージを与えてくる方。

なぜこんなにも周囲の視線の話をしているのかというと、

「ええと、親の仕事の都合で今日からこのクラスに編入することになりました、茅梨雅かやなしみやびです。よろしくお願いします」

僕が転校生としてこの学園に編入したから。

転校生は初めの挨拶が肝心らしい。僕はよくわからないけど、誰かが言ってた気がする。

クラスみんなは、ワー！ と盛り上がる訳でもなく、ひそひそ話をしている。

父の仕事の都合で何回か転校してきたので、その辺は十中八九予想済みだ。

しかしこの視線はあまり好きではない。これだけは何回転校しても慣れない。

「とりあえず転校生は、えーと、窓際の一番後ろに座ってくれ。隣がクラス委員だからわからないことがあったら彼女に聞いてくれ」

僕は「はい、わかりました」と先生に軽く返事をして、指定された席に向かう。

席につくと先生はみんなを注目させて、今日の体育の場所などいろいろな話を話し出した。

なかなかいい席だな。ここなら少し寝てもばれないし

「寝てはいけません。エロ本はもつと駄目です」

「えっ!？」

不意に隣の席
子が尋ねてきた。

ええと、クラス委員だっけ

の女の

「見つけ次第没収して先生に提出しますからね」

エロ本を持つてくる前提で話さないでほしい。

それ以前になんで僕の思考がわかったの？ 読心術を取得しているクラスメイトなんて初めてだ。

「寝ようとは考えてたけどエロ本は思っ
てなかったよ」

「おかしいですね。思春期高校生の九割はエロ本が好きなのに」

「何情報かは知らないけど僕は残りの一割の方だから」

実際エロ本は持つてない。

一回友達に無理矢理もつて歸らされた時、なぜか妹が私物チエツクをしてきて見つかったからだ。

その時「なに読んでんのよ! 変態! キモい! マジで死んで!!」とか言われた気がする。死んでまでは言われてないかも。

そのせいでエロ本に興味がなくなつたんだよなあ。

あ、一冊だけ持つてた。見つかった日の翌日の晩に今度は妹に無理矢理渡されたのだ。妹もののエロ本を。

ちなみになんでこんなの渡すんだ? と聞いたところ「兄貴が持つてた年上もののやつより多く罵れるからよ」と言われた。

いや、そんなこと言われて読むバカはいねーよ。と思つたが、家庭内で俺は妹より発言力が弱いのでそこは押し黙つた。捨てようとする
と怒りだすので、ベッドの下の一
番奥に箱に入れて置いてある。社会の参考書のカバーを被せて、箱にも南京錠をつけた。

あれつていつだったっけ? ……意外に結構最近だったかも。

「まあ、読まないのならいいです。私の名前は御鏡菫みかがみはきです。なにかわからないことがあつたら聞いてください」

「あ、うん。ありがとう御鏡さん」

第一印象は悪くないだろう。みんなへの挨拶も上手くいったはずだし、クラス委員との会話も成立した。

後は友達だなあ。

今まで一つの学校に滞在する期間が短かったので友達を作らなかったが、今回は結構長いと聞かされた。だったら友達の一人や二人は作った方がいいだろう。

しかし今まで作らなかった分、友達の作り方がよくわからない。とりあえず手当たり次第に仲良くなっておこう。

丁度朝のホームルームが終わったので席を立とうとすると、クラスの半分くらいの人が俺の席に集まってきた。

あー、密集地帯はあまり好きじゃないんだけど……。まあ、これも今日一日だけだから我慢するでしょう。

それに相手から来てくれるなら願ったり叶ったりだ。いちいち話しかける手間が省ける。

「よろしくな転校生。俺がこのクラスの男子をまとめてる、葛霧風間^{さきま}だ。男子同士仲良くやろーぜ」

初めに話しかけてきたのは百六十五の僕より少し背の高い男の子だった。

茶色の短い髪で前髪を上にあげてピン止めらしきもので止めている。悪いやつだけど実はいいやつみたいだな。簡単に言えば悪がきキヤラだ。

「ああ、うん。よろしくね葛霧君」

「おいおいつれねーなあ。風間でいーぜ転校生」

「じゃあ僕も転校生じゃなくて茅梨とか雅とか……」

「おつとわりいな。転校生って名前のやつが欲しかったんだ。悪いけど変えねえわ」

「知らねーよ！ それに転校生って名前じゃねーし！ つーかそんなやついいねーよ！」

駄目だ。いちいちつつこんでいたらきりが無い。

「ところで転校生。一時間目は自習だからこの学園の中を案内してやろーか？」

「いや、駄目だろ？ 自習でも真面目に」

「駄目に決まっています！」

俺が言い終わる前に御鏡さんがパンツと机を叩いて立ち上がった。
「なんだよ堅物クラス委員。自習よりもまず学園のことを知らねえと
いろいろ困るだろ？」

「そんなものは休み時間や昼休みにすればいいんです！ 自習とは
いえ授業をサボることは許しません！」

あー、御鏡さんって絵に描いたような学級委員長タイプだな。

「なら転校生に聞いてみた方が早いんじゃないか？」

「それはいい考えです。茅梨君、どちらの考えが正しいか教えてく
ださい」

そのタイミングで僕に振るか？ 逃げ場がなくなっただからとりあ
えず頼った、みたいな感じで。

「ええと、学園の事も知りたいけどやっぱり授業は受けた方がいい
と思うよ」

風間には悪いと思うけどこれが正論だから諦めてもらおう。でき
れば昼休みにもう一度誘ってほしい。

「転校生がそう言うなら諦めるぜ。また休み時間に行こーぜ」

「うん。ありがとう」

「よかった。茅梨君は真面目なタイプで。茅梨君ほどの真面目なタ
イプは少ないです」

御鏡さん。鏡を見てください。そうすればあなたの目の前に現れ
ますよ。御鏡だけに鏡を見ろってか？

「茅梨君、なにを考えているかわからないですが、多分面白くない
事を考えていますね？」

御鏡さんが読心術を発動。勝手に読まれてダメ出しされる僕はな
んて悲惨なんだろう。

やる気を根こそぎ奪われた僕は机に突っ伏したまま授業が始まる
のを待った。自習だけ。

転校初日は良い感じ！？（後書き）

初めまして、バカ夜空です。

えーと、いくつか作品があるのですが、今回は『笑い』と『恋愛』を重視して作りました！

え？ あんまり入ってないって？ ……そこは気にしない気にしない

続きは頑張って書くのでよろしくお願いします

お昼ご飯は屋上で!?

何事もないまま昼休みを迎えた。

「おーい、転校生。一緒に飯食わねーか？」

「ああ、うん。いいよ」

今まで転校初日は大抵一人で昼ごはんを食べていたのに、今回は違うようだ。

風間はなんて良いやつなんだろう。

「あれ？ その子は……」

「ん？ ああ、こいつか。俺の幼馴染みで転校生に一目むぐつ！」
なにか言いかけた風間の口を隣にいた風間の幼馴染み(?)の女の子が無理矢理押さえた。

転校生って聞こえたけど僕が関係しているんだろうか？

「な、なんでもないですよ！ 気にしないでくださいね！」

「う、うん。わかったよ」

彼女がそう言うんだ。きつとそういう事だろう。……どういう事だろう？

「こいつは秋風^{あきかぜ}松^{すずな}って名前ですつきも言った通り俺の幼馴染なんだ。仲良くしてやってくれ」

そついう事なら嬉しい限りだ。友達が多い方がなにかといいし。

「じゃあ、よろしくね、秋風さん」

「は、はい！ よろしく願います！」

「挨拶も済ませたし、屋上行こーぜ。ここより屋上で食った方が絶対美味しいから。俺のオススメの場所だ」

風間のオススメの場所だ。多分良い場所なんだろう。

風間、僕、秋風さんの順番で教室を出て、屋上に続くであろう道を歩く。初めて通るからよくわからない。

廊下の角を曲がり階段へ。今いる二階から四階まで上り、もうちょつと上るとドアが一つ現れた。

多分これが屋上のドアなんだろう。初めて来たからよくわからない。

「到着したぜ。ここが屋上だ」

風間がドアを開けながら、手で僕達を屋上に入るように誘導する。まるでどこかの執事さんみたいだ。

屋上はというと……うん。普通だ。これと言って特徴的なものはないし、他と違うところもない。

「殺風景だけどこの時期は丁度良い感じの涼しい風が吹いていて気持ちいいぜ」

まあ、今は春と夏の間ぐらいだから暑くもなく涼しくもない。涼しい風が吹いてくれたら気持ちいいだろう。

「とりあえず食べようぜ。学園内を見る時間が無くなっちまう」

おっと、忘れるところだった。風間と昼休みに学園見学をする約束をしていたんだ。

今日は新学校という事で張り切って弁当を作ってきたんだよなあ。

「おっ！ 転校生の弁当めちゃうくちゃ旨そうじゃん！ 転校生の母さん料理上手いんだな」

「いや、これ僕が作ったんだけど」

「転校生が作ったのか？ それスゲーな！」

俺の両親は共働きで、家には四ヶ月に一回帰って来るか来ないかぐらいだ。兄妹は妹と姉がいるが、姉はお菓子を作るがそれだけで、妹の方は全くなにもできない。

なので唯一料理ができた僕が小さい頃から作ってきた。いや、まるで当たり前のように作らされてきた。

そう思うと僕に料理の才能がなかったら終わっていたなあ、僕の家庭。

「卵焼きもーらい！」

あつ！ 妹に取られて一つしか残らなかった唯一の卵焼きがあ！ かしもう食べられてしまった後なのでやかく言っても仕方がない。

「わりー、わりー。美味しそうだったからつい。まあ、これやるから機嫌なおしてくれよな」

そう言っただけで差し出されたのは　ほうれん草。

「嫌がらせか！」

「あれ？　草食動物じゃなかったか？」

「弁当箱には野菜しか入ってないけど肉も魚もちゃんと食べる！それにそこは草食動物じゃなくてベジタリアンと言ってくれ！」

妹に肉系は全て取られて、魚系は姉に全て取られるんだ！

そう考えると僕の家族は基本嫌がらせしかない。妹は物理的にも精神的にもダメージを与えてくる。姉の方は別の意味でダメージを与えてくる。どっちも厄介だ。

ちなみに妹と姉は二人とも僕と一つしか離れていない。

まあ、僕の家庭事情はこれくらいにしよう。

それからほうれん草から格上げされたミートボールや、張り切りすぎて意外に量が多かった弁当箱の中身を全て食べ終えた。

約束通り、僕と既に食べ終えていた風間と食事中ずっと喋らなかった秋風さんの三人で校内を見て回る事になった。

まず最初に来た場所は　食堂。

「なんの嫌がらせだ！」

「いや、場所的にここが近かったんだって」

ニヤニヤしながら風間が答える。

絶対嘘だ。どう考えても四階より上にある屋上から、真っ先に一階にあるここに向かう理由がない。あるとしたら食べ過ぎた僕への嫌がらせだ。

「ご、ごめんなさい、雅くん。風間くんは気に入った人をからかう癖があるの。だ、だから大目に見てあげてください」

風間に聞こえないぐらいの小声で秋風さんが謝ってきた。

「別に怒っているわけじゃないよ」

僕も風間に聞こえないよう小声で返事をする。

この時僕は「呆れてるだけだー！！」と言いかけたがぎりぎり口

には出さなかった。そこまで外道になりたくない。

「おいおい、なに二人で内緒話してんだよ。俺もまぜてくれよな！」

「はいはい、風間くんは雅くんに次の案内場所を教えてね」

風間は秋風さんに完全に負けてるな。僕と妹の関係みたい。

「み、雅くん！ 私図書委員の仕事があるから、後は風間くんと二人で行ってくれるかな？」

「うん。忙しいのにごめんね」

「い、いえ！」

図書委員の仕事があるとかで秋風さんがいなくなり、野郎二人で回る事になった。

「おい、転校生。お前って年下派？ 年上派？」

「特にないけど……」

「じゃあ、両学年行こーぜ」

階段から一つ上の階へ行き二階へ。

「ここは一年生のクラスがあるぜ。転校生が年下派ならここは絶対通るから覚えておけよ」

「いや、違うつて」

「とりあえず一通りクラスを見て回るか」

何故に！？ 上級生が下級生のクラスを見て回るのはおかしくないのか？ 風間の中では普通なのか？

ああ……、またしても視線が痛い。本日二度目。

それにここには僕の

お昼ご飯は屋上で！？（後書き）

ふー……あー肩が凝る……。眠いの三乗くらい。（眠い×眠い×眠い）

どうでもいいこと書いたな……。

今日は学校休み（当たり前だが）だったから頑張って書いたぜ
いやー、個人的に菰のキャラ好きだわー 『雅Ⅱ菰＞萩＞風間』ぐ
らい（笑）

僕の家族は絡みにくい！？

「こんなところで何してんのよバカ兄貴！」

妹がいるんだよなあ。言っただけから出てくるな。意思疎通するな。

「学校を案内してもらってるだけだよ」

風間の前だ。少しは穏やかになるだろう。

「そんなこと言って年下の女の子を見に来ているんでしょ！……失敗した……あれを読めば少しは私に……」

最後の方はよく聞こえなかったけど、菖蒲はいつも通りうるさいな。……人前なんだから穏やかになれよ。

かやなし あやめ 茅梨菖蒲。僕の妹。注意、蹴る、殴る、怒る、罵倒します。無闇に餌を与えないでください。

この妹と一日に二回会話が成立してしまうとドンマイ。三回と四回なら残念。五回以上はさようなら。

起こすときに普段は回避できるのに一回。卵焼きを取られたのを合わせて朝に二回。今のを合わせてもまだ計四回目だからまだ残念レベルだ。次に話せばさようなら。

それぐらい話したくない。僕に対して口を開けば罵倒。閉じれば無視。最悪にも程がある。

妹がいらない変態ロリコン男は妹が欲しいとか言うけど、妹がいても良いことがないということを知らないからそんなことが言えるのだ。

「このロリコンが！」

「何故に風間が！」

急に風間に言われたが、風間にだけは言われたくない。

どっちかと言うと、風間が連れてきた。つまり風間が来たかったということ。

「風間ってかなりロリコン？」

「超以上激以下のロリコンだ！」

ピースと笑顔は超一級だが発言自体は超最悪。超以上激以下ってなんだよ。もうよくわかんねーよ。

下級生が汚物を見るような目をしながら僕達から遠ざかる。僕まで巻き添えをくらった。

「そのロリコン二人、早くこの階から離れろ！」

何故か嬉しそうな菖蒲に続いて何人かの女子も僕達に罵倒を浴びせる。

「僕はロリコンじゃない！」

あ。会話が成立した。さようなら。

「おい、転校生！ ボケツとしてないでさっさと次に行くぞ」

「風間のせいであつたと行かないといけなくなつただけだな！」
彼女達の罵倒から逃れるために来た道を戻って階段へ。

「次は上級生だ！」

ああ、風間って懲りないやつなんだなあ。
それとも全ての場所を僕に教えるために？ ……いや、それはないな。まさかこいつ上級生も？

「さあ、ここがお姉さんの宝庫だ！」

いえ、普通の校舎の四階です。

風間は女たらしなんだなあ。今ごろ気付く僕って……。

「わかったから教室に行こうよ」

「速効性なやつだな。年下は廊下を歩くだけだったのに年上はクラスも見たいのか？ じゃあ、一組から行こうぜ」

しまったあああ！ 僕的には「（自分達の）教室に行こうよ」と言つたつもりなのに、風間的には「（年上の）教室に行こうよ」とつたらしい。

風間は確かにこういうやつだった。いや、今日初めて会つたんだけど。

「何悶えてんだよ転校生。早く行こうぜ」

「いや、悪いんだけどもういいや。なんか疲れた」

「ん？……ああ、さつき下の階で会った転校生の妹のせいかな」

「風間のせいだああああ！！」とは流石に言わない。一応案内してくれたんだし。

「雅さんですか？」

この声は……。

教室へ戻ろうと階段の方を向いていた顔を機械のようにギギギと半回転させる。

「やっぱり雅さんです！　ああ、今日もかわいいです」

まるで子猫を見つけた女の子のように僕のもとへ駆けてくる。

今日もって……朝も会ったし、その台詞は毎日のように聞かされているからもう聞きあきた。

「転校生の知り合いかな？」

風間の質問に答えたのは僕じゃなくて、

「茅梨雅さんの婚約者、茅梨牡丹^{ほたん}です」

「それは記憶の捏造だ！！」

「……こんなにやく者？」

「かわいそうなくらいしょーもない！」

同情するほどしようもなかった。今のを聞いていた上級生達も僕と同じように風間に同情の目を向けている。

「ゴホンッ！……えーと、実際誰なんだ？」

風間はわかりやすい咳払いをして今度は僕に答えを求める。

「僕の姉だよ」

「お前の姉がこんなに綺麗なわけがない！！」

失礼だな。それは僕がキモいということか？　かつこいとまではいかないけど、そこまで悪くないと自覚しているんだけど。

「そんなことないよ？　雅さんはこんなにかわいいじゃないですか」
「」

そう言って抱きついてくるが恥ずかしくないのか？　僕は恥ずかしい。

それとその豊満な胸に僕の顔を埋めないでください。息ができません。

くなります。

「ぷはっ！ とりあえず姉さん、離れてくれ」

胸から脱出した僕は手で姉さんの肩を押す。苦しかった。後数秒遅れていたら昇天していたな。

「雅さんが冷たい……反抗期なんですか？」

「反抗はしてないからな！？」

姉さんから見れば反抗しているように見えるかもしれないが、僕は全く反抗していない。

「産まれた時はあんなにかわいかったのに……」

「……今は？」

「今も十分かわいいです」

駄目だこりゃ。救いようがないブラコンだ。

「後つつこむの忘れてたけど僕が産まれた時、姉さんは一歳だから絶対覚えてないよね！？」

「思い出は時をも越えるんです！」

越えられねーよ。あ、走馬灯ならいけんじゃねーの？

「とりあえず落ち着こうよ姉さん」

周囲に人だかりができた。これ以上姉さんをヒートアップさせれば、酒を飲んだ人のように暴走してしまう。

「そんなことを言っているから雅さんはいつまでたってもどうていなんですよ！？」

間に合わなかった。暴走姉さんモードだ。……っておい！

「姉さんの言ってる『どうてい』は道の距離やみちのりって意味の『道程』じゃなくて『童貞』の方だよね！？ 公衆の面前で弟の秘密を暴露するな……！」

ああ、恥ずかしさで死にそう。僕も僕で、口で言ってもわからないことを口走っているし。

「もう嫌です！ 家に帰ってお酒飲みますよ……！」

「いや、姉さん未成年者だし家には父さんが飲まないから酒は置いてないよ」

「買ってくるんです！」

「だから未成年者だから買えないよ」

「うつつ……。雅さんの意地悪ー！！」

「正論だし」

姉さんは「ばかー！！」と捨て台詞を吐いてどこかへ走り去っていった。ああなるとなかなか立ち直らない。めんどくさいなあ。

「……戻るか」

「……そうだね」

上級生の視線を背中に受け、僕と風間はとぼとぼと階段を下りた。二年のクラスがある三階についた時、チャイムが鳴り出した。

「次の授業ってなんだっけ？」

「えーと、確か体育……」

「……………」

体育は制服じゃなくて学校指定の体操服で受けるもの。今まで僕は学校を回っていたわけで。

「「急いで着替えないと（ねえと）！！」」

教室に戻ると着替えが遅い女子が残っていて、いろいろ大変だったが授業にはギリギリ遅刻しなかった。

転校初日に授業に遅刻しかけたのは初めてだった。転校初日に上級生と下級生両方に目をつけられたのも初めてだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7606y/>

七草

2011年11月27日10時47分発行